慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小泉信三・ 三辺金蔵共訳 戦争是非
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1915
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.9, No.10 (1915. 10) ,p.1201(125)- 1203(127)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19151001-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

り。評者が氏の論斷に敬服するはかゝる公平なる意見の散見するが爲なり。一〇三頁にサー。エドワードが駐獨大使官參事官に寄せたる文書の第一節に獨佛伊とある可きを獨佛露とせるは既にその誤謬なることを『開戰關係外交文書大全』には指摘しあり、然るに本書は『青書』の當初の誤を訂正せず、又二四一頁に於てはヂオリッチを伊國外相となせり。されどかゝる大著に於て若干の誤謬あるとも之を咎むること寧ろ非常識ならめ。

但し最後に一言し度きは本書の表題なり。今回の大戰若し人類の凶事なりとせば、寧ろ之を The History of Thirteen Days と改めたる方趣味深きにあらざるか、十三の數は歐米人が一種の迷信より凶兆として忌む所、而して戰端破裂を促したる外交上の交渉は本書の表題に示すが如く七月二十四日に開始されずして、七月二十三日墺國政府が塞國に對して最後通牒的なる外交上の覺書を提出したるに始まるに於ておや。抑も亦碩學ヘドラム氏にも亦この十三の數を忌むの迷信ありて、戰役終局の結果の協商側の勝利にあらんことを期待しつゝ、故ら『十三日間の歴史』と命名することを避けたるにや。

高島佐一郎著『金融の原理』

大正四年九月東京寶文館發行
菊版三百九十八頁定價壹圓五拾錢

本書はバーカー氏著『現金と信用』を補譯せるものなり。バーカー氏（D. A. Barker）の原著 Cash and Credit（千九百十二年倫敦出發）は劍橋大學科學文學叢書の一冊として上梓せられし一小冊子なるが、平易達意の文章を以て貨幣と信用の關係、金融の原則、外國爲替の原理、英蘭銀行と金融市場との關係を明快に說述せる一好著なり。殊に信用並に國際金融の原理の圖解は著者獨特の考案に係るものにして、複雜なる是等原則の了解に資する所少からず。

補譯者高島氏は東京高等商業學校專攻部に於て金融論を攻究せられ、數年前卒業せられてより暫らく中央大學に於て銀行論等を講義せられ、昨今は小樽高等商業學校に於て主として金融論の講座を擔任せられつゝあり。氏は最近數年間に於て幾多學術雜誌に於て或は外國知名の學者の筆に成る金融論を紹介し、或は此問題に關する氏獨特の研究を發表せられし篤學者にして、本誌も既に數回氏の論文を掲出するの榮を得たるは諸者の記憶する所なる可し。されば、氏はバーカー氏著述の紹介者として頗る適任なりと云はざる可からず。加之、高島氏は單にバーカー氏著書の內容を譯出するに滿足せずして、パジオット、クレーア、ニコルソン、キーンス、フイッシャー、コナント、カプスト、ヤッフエ、リーサー等の貨幣銀行論の大家の說を參照してバーカー氏の說を敷衍し、加ふるに自家の見解を挿みて內容を充實するに努めたる結果、高島氏の補譯は分量に於て原著の約二倍に相當するが如し。但し補譯は原書の章節を追へるを以て、全體の結構はバーカー氏の著書と同一なりと云ふを得るが如し。

本書は更に附錄として『イコノミツク・ジヤーナル』誌主筆ジエー・エム・キイーンス氏の筆に成る二論文（The City of London and the Bank of England, Aug 1914 並に The Prospects of Money, nov. 1914）を譯載し、本文に於て解說せる金融の原則が今次の大戰に際して英國に於て如何に働きつゝあるかを示すの一助とせり。補譯者の用意周到なる之を以ても察知するを難しとせず。

本書は貨幣鑄造、紙幣發行の技術、又は銀行の組織、經營等の技術を說明するものに非ずして、一國內並に國際間に於ける信用伸縮の根本原理を解明するものにして、苟くも實業に趣味を有し、實業と金融との關係の密接なるを恰も身體と血液の循環との關係の密接なるに異ならざるを知れる者の座右に備ふ可きものなりとす。

小泉信三　三邊金藏　共譯『戰爭是非』

大正四年九月慶應義塾出版局發行
四六版百三十一頁定價金三十五錢

今次歐洲の大動亂に參加せる歐洲大陸の諸强國並に諸弱國は皆な乾坤一擲混戰以て各々社稷の長久を圖りつゝあるに、獨り對岸の英國はグレー氏の外交が開戰の導火線たりしにも拘らず從容として迫らざるの慨あるのみならず、其國民の動作より之を視るも、將た又其の態度輿論に就きて之を徵するも大陸諸交戰國に於けるが如き擧國一致は之を見ることを得ざるなり。彼の宣戰の當時二三內閣員の掛冠せるが如き、義勇兵募集の振はざるが如き、軍需品製作運輸に甚大の影響を及ぼすことを顧みずして炭鑛夫が同盟罷業を企てしが如き、又徵兵制度施行に關する朝野輿論の一定せざるが如きは少く

とも義勇奉公を以て國民の最大義務と信ずる（或は聲明せる）我國人をして奇異の感を懷かしめたるものなるも、惟ふに悠々閑々たる英國民の態度は過去數百年間入寇の苦痛を嘗めしことなき上に殊に奈翁を屈服せしめたる歴史より生ずる自信と自國海軍の優勢に對する信認との顧したるものなる可し。昨年我國が獨逸に對して開戰を布告し青島に遠征軍を送りし際、我國民の態度は必ずしも舉國一致と云ふこと能はざりしが如し。是れとは程度を異にすれども、歐洲戰亂に參加せる英國の事情は其自信力に於て稍々我國の參加と相似たる所なきに非ず。

されば、我國に於て青島攻撃を非難する者續出せしと同じく英國に於ても亦戰爭參加に對して政府の責任を問ひ、且つ其後に於ける政府の對戰政策に就きて非議論難を加ふる者少からず。マクドナルド、シヨウ、エンジエルの諸氏は其中最も著名なるものなりとす。されど是等輪答の如く政府を罵倒することを以て死兒の齡を數ふるものなりとし、彼等とは多少異れる見地に立ちて戰爭の原因を講究し、以て將來戰爭を根絶せしむるの方策に就きて思索を廻らす憂國の人士もあり。吾人が茲に紹介する『戰爭是非』の原著ヂキンソン氏は即ち其一人なり。

ヂ氏（Goldworthy Lowes Dickinson）は倫敦經濟政治學校に於ける政治學の講師にして歴史宗教等に關する著述數篇あり。曾てカーン氏旅行奬勵基金の補助を受けて東洋に遊び其序我國に來朝し歸國後同基金監理者に對する報告書として An Essay on the Civilizations of India, China and Japan（印度支那日本文明論）と題する一小冊子を發表せり。此書に載せたる我政治組織の缺陷並に教育方針の根瑳に對する批評苦言は肯綮に當れる所少からずして、其の觀察力の非凡なるを洞察することを得可し。曾て我國の裏面を英に以て英國に紹介せし日本を知れるヂ氏の近業が邦文に飜譯せられて邦人に紹介せらるゝは何等かの宿緣に依ると謂ふ可き乎。

本書の原著は題して The War and the War Out と云ふ。譯書は題して『戰爭是非』とせるが、原題を直譯せば、『戰爭と之を避くる方法』とも云ふ可し。著書論旨の骨子は下の如し。

凡そ戰爭は人民の欲する所に非ずして、爲政者が勝手に之を企て人民をして餘儀なく血税を拂はしむるものなり。今次の大戰爭に就きて云ふも亦同じ。而して斯くの如き悲慘なる戰爭の再發を防ぐ爲めには次の二原則を守らざる可からず。

（一）講和の際戰勝國は戰敗國の領土を併容す可からざること

（二）アルサス・ローレン又は波蘭土の如き國際間に葛藤を惹起し易き領土が何れの國の主權の下に置かる可きかは各其領土住民の意志を尊重して定む可きこと。云々。

國民が擧つて反對せる際に政府が他國に對して干戈を動かすこと能はざるのみならず、多くの戰爭が結局國民間に於ける利害の衝突に依りて勝致せらるゝものなることは吾人の茲に喋々するを要せざる所にして、ヂ氏の戰爭論は聊か楯の一面のみを見たる議論なるが如きの感なき能はざるなり。而かも爲政者の野心、軍人の虚榮心、軍艦、軍需品等の供給者の射利心が戰爭熱を煽りて以て國際關係をして險惡の狀態に陷らしむるに至る是等爲政者軍人、實業家の責任を呼號せる點に於て吾人はヂ氏説に裏書せざるを得ず。平和維持策としてのヂ氏の領土不割讓説に至りては今次戰亂終局の狀態如何に依りては必ずしも其實行不可能と云ふ能はざる可けれども、率直に之を評せば一の理想たるに止まるならん。

要するにヂ氏の戰爭並に平和論は智よりも寧ろ情より湧出せるものにして從つて興味も亦此に存せるが如し。加ふるに其行文の流暢高雅なる殆んど讀者を魅せんとする所あり。氏の文體の純潔なるはアヂソンの夫れの如く、其輕快なるはラスキンの如しと云ふ可きか。

譯書は序文と附言（各二頁）を除きては原書の本文全篇を譯載せり、譯文は頗る輕妙なる口語體を用ひ、其の流暢にして雅致に富める點に於て原文を辱かしめざるものと云ふ可きなり。共譯者小泉三邊兩氏は三年前笈を負ふて英國に遊學せられしが昨年大勃亂突發の際に伯林市を去つて英京に遷られし人にして、主なる交戰國の戰時狀態に精通せらるゝを以て、ヂ氏著書の譯者としては最適任者なりと云ふ可し。

本書はヂ氏著述の譯文以下に共譯者兩氏の筆に成る序文各一編を收めたり。小泉氏はヂ氏の戰爭論の概要を示して之に批評を下し、三邊氏はアトキン孃の平和論を紹介せり。本書は僅々百三十頁の一小冊子なりと雖も、一交戰國の平和論者の説を傳ふる點は於て、此大亂中に於ける英國民の餘裕綽々たるを示す一證を提示する點に於て讀者の看過す可からざるものなることを信ず。

土屋　興著『英國勞働不安』

大正四年九月慶應義塾出版局發行
四六版三百三十四頁定價金壹圓

本書は最近英國に於て續出せし資本對勞働爭議の眞相を叙述し、其原因を闡明すると同時に、我國の勞働問題解決上參考に資する所あるを期せるものなり。著者土屋氏は慶應義塾政治科出身にして、卒業後操觚者となりて職を大阪毎日新聞社に奉ぜしが、去る四十四年中英國に遊び親しく同國に於ける勞働紛議の狀態を觀察せり。本書に載する記事論斷は多く